世界原子力大学「夏季研修2009年」に参加して

H21.9.15　日本原子力産業協会　国際部　小西俊雄

今年も Mentor（Facilitator）として参加した。昨年に続いて2度目である。その感想を簡単に纏めておきたい。

「第5回夏季研修」の今年は英国オックスフォード大学を会場に開かれた。参加者は37ヶ国・地域からの若者100名、うち女性は38名。参加者の多かったのは米国（14）、カナダ（12）、フランス（10）。次いでスウェーデン、開催地の英国が6、日独の5と続く。業界別では、産業界が約6割強を占める。

特徴的に感ずるのは、途上国からの参加国が入れ替わっていること、先進国からの女性参加者の増加だろうか。前者は参加費を支援する IAEA の「公平配分」指向が原因であろう。途上国からの参加者は、国の機関、国営機関からが昨年同様多い。

今年1番の印象は、わが国からの参加者の活躍である。元気に活動に参加し、交流を深め、それによって得るところも大きかったと思えることである。喜んでいる。全体セッションでの発言、作業グループでの討論参加、課外活動での活躍など、5名という数の力、個々人の能力・性格が幸いして日本のプレゼンスを高めてくれたと思うのである。来年も、多くの方が参加を考え、また、管理者の方は送り出して国際感覚を持つ中堅を育てる手段として考えていただきたいと願っている。

今年の参加者、過去の参加者がその得たことを日常業務に生かし、他国の若者との意思疎通を図って国際社会、あるいは国内業務で育ってくれることを願っている。国内業務であっても、原子力ルネッサンス時代に入る今、「国際感覚」は不可欠な能力だと思うのである。それは、自分の意見を持ち、相手の目線で対話のできる技術であり、話術であり、マネージメント能力である。

過度に日韓を意識するわけではないが、分かり易いので比較してみる。昨年の日韓参加者数が1：8だったのに対し、今年は5：4と逆転し、加えて上記の参加者の質・量における優位さで「アジアの日本」の印象が全体に行きわたったと思うのは贔屓目か。昨年とまるで逆である。

第2の印象は、講師陣の国別分布に偏りが強かったことである。運営関係者、地元関係者を除く講師陣（招待講演者を含む）約55名中、「欧米」が45名近くを占める。若者を「援けて」討論の円滑推進を図る Mentor は、10名中6名を米仏が占める（各3）。言葉の問題も大きいだろうが、心配も生ずる。

「運営上の便宜」を理由に、ここ当面は英国オックスフォードに腰を落ち着けて開催すると本部の方針を耳にすると、この状態がしばらく続くのではないだろうかと思えてくる。話し手が意識する、しないにかかわらず、原子力に対する姿勢、設計や安全の考え方、あるいは核セキュリテイーや核不拡散に対する考え方など、これからの世界原子力界を指導する「団塊の世代」が多くの分野で「その（欧米）文化」を耳にして育つのではないか、そこではアジアを始めとする「（原子力）文化」が置いていかれるのではないか、ニューカマーがアジア・中近東に多い今、その文化に接する機会を逃して世界の指導者が育つこと自体が問題ではないのか、と個人的な懸念が先行する。

もっと、アジアからの話し手、日本からの話し手が欲しいと思う。今年の研修で演題に立った日本人は2名。しかし、「水問題」を語った筆者、「Newcomer 支援」を論じた現 IAEA 職員ともに「日本」からのメッセージではなく、IAEA からのメッセージ主体である。現行炉技術、次世代炉技術、安全文化など、語れる日本の権威は多いはずである。機会があれば積極的に立ち上がっていただきたいと願っている。幾人かの方を勝手に推薦させていただいて帰国した。日本でこの「夏季研修」を開くことができればより効果が期待できるであろう。

全体としては、昨年同様に内容豊かで充実した研修だった。夏季研修全体、今年の研修プログラムその他の詳細情報は、下記の日本原子力産業協会ホームページでごらんいただければ幸いである。

「WNU 夏季研修の紹介（http://www.jaif.or.jp/ja/wnu_si_intro/index.html）」

（完）